

ドライデンの『諷刺詩論』

内 藤 満

〔抄録〕

ドライデンが一流の作家として文学史に名を残すようになったのは、諷刺作家としての名声に依るところが大きい。彼の『諷刺詩論』は諷刺の起源を明らかにし、古代ローマの諷刺作家について論じた労作である。豊富な古典の知識を生かし、批評家ドライデンの面目躍如たるものがある。

本稿の目的はこの『諷刺詩論』の内容を概観し、ドライデンの諷刺に対する考えを探ることである。主に、叙事詩に関する部分と、三人の諷刺詩人を論じている部分の二つのまとまりを中心に論じた。なお、大きな割合を占める諷刺の起源を考察した部分については、本稿の主題との関係が薄いと思われるので省略した。

キーワード 諷刺, 叙事詩, ウィット, 古典主義

序

『諷刺詩論』(*Discourse concerning the Original and Progress of Satire*, 1692) はジュヴェナールとペルシウスの諷刺詩の翻訳に付けられた献辞である。この献辞は、当時の有力な政治家で、文芸の庇護者であったドーセット伯に捧げられている。ドライデンの時代にはまだ、諷刺の概念が曖昧で混乱していた。ジャンルの問題、語源的な問題、倫理的問題、形式の問題などが明確ではなかった。⁽¹⁾これらの混乱にドライデンは、諷刺の定義付けの必要性を感じた。諷刺の議論において、依然重要な論考である。

I

ドライデンはこの献辞の最初から諷刺の起源の考察に入るまでのかなりの部分を、叙事詩に

ついでに議論に費やしている。古典主義において詩の最高のジャンルは叙事詩であった。壮大な叙事詩を書くことが一流の詩人の証明であった。ドライデンもその例にもれず、叙事詩によって名声を上げたいと考えていた。しかし、結局、彼はその野心を実現することはできなかった。桂冠詩人の任を解かれ、ますますその機会がなくなると、彼は代わりに古典作家の翻訳という形で埋合せをした。彼が本格的に叙事詩を書く計画をしていたことが次の言葉からわかる。

Thus, my Lord, I have, as briefly as I could, given your Lordship, and by you the world, a rude draught of what I have been long labouring in my imagination, and what I had intended to have put in practice, (though far unable for the attempt of such a poem,) and to have left the stage, (to which my genius never much inclined me,) for a work which would have taken up my life in the performance of it. this, too, I had intended chiefly for the honour of my native country, to which a poet is particularly obliged. Of two subjects, both relating to it, I was doubtful whether I should choose that of King Arthur conquering the Saxons, which, being farther distant in time, gives the greater scope to my invention; or that of Edward, the Black Prince, in subduing Spain, and restoring it to the lawful prince, though a great tyrant, Don Pedro the Cruel:⁽²⁾

このようにドライデンの叙事詩に対する思い入れは強いものだった。劇作において英雄劇 (heroic play) にこだわったのもこのためであろう。彼はホーマーとヴァージルを称賛し、叙事詩に彼らに優る者は今までに現れていないと断言する。スタチウス、ルーカン、アリオスト、タッソー、スペンサーにミルトン、いずれも彼らを越えられない。ミルトンに至っては、彼の主題は英雄詩のものではないと言っている。

His design is the losing of our happiness; his event is not prosperous, like that of all other epic works; his heavenly machines are many, and his human persons are but two.⁽³⁾

この見解には確かに問題があるが、ここでは論じない。ドライデンは古典主義者として、上記二人の古典作家の作品を叙事詩というジャンルを分ける時の基準にしているわけで、叙事詩の本質が何かまでは考慮されていない。

アリストテレスは悲劇を、その統一性の故に詩の最高のものとしたが、ドライデンは次のように異を唱える。

But after all these advantages, an Heroic Poems is certainly the greatest work of human

nature, the beauties and perfections of the other are but mechanical; those of the Epic are more noble:⁽⁴⁾

より具体的な相違点として以下のように述べている。

Tragedy requires a less and more confined knowledge; moderate learning, and observation of the rules, is sufficient, if a genius be not wanting. But in an epic poet, one who is worthy of that name, besides an universal genius, is required universal learning, together with all those qualities and acquisitions which I have named above.⁽⁵⁾

統一性ということも大事だが、壮大な人生の物語を示すことによって、教訓と共に楽しみも与えることに高い価値を認めている。

ドライデンは劇作家の数に比べて叙事詩を試みる者が少なく、また、成功した者も極わずかしかない事実を、叙事詩の偉大さの証明としている。しかし、彼はまた、現代の偉大な作家の多くが、何故叙事詩を書くのに失敗しているか、その原因も考察している。彼はそれを自分たちの宗教にあるとする。

And 'tis true, that, in the severe notions of our faith, the fortitude of a Christian consists in patience, and suffering, for the love of God, whatever hardships can befall him in the world: not in any great attempt, or in performance of those enterprises which the poets call heroic, and which are commonly the effects of interest, ostentation, pride, and wordly honour: that humility and resignation, are our prime virtues; and that those include no action, but that of the soul; when as, on the contrary, an heroic poem requires to its necessary design, and as its last perfection, some great action of war, the accomplishment of some extraordinary undertaking; which requires the strength and vigour of the body, the duty of a soldier, the capacity and prudence of a general, and, in short, as much, or more, of the active virtue, than the suffering.⁽⁶⁾

このようにキリスト教の信仰と叙事詩の世界は根本的に違うことを指摘する。

さらに言えば、ドライデンの時代あたりから、徐々に市民社会が形成され始めたことが関係していると言えるだろう。素朴で好戦的なホーマーの聴衆と都会に住み文明化された人々では求めるものが違う。18世紀になって小説を自分たちの文学形式として受け入れた人々には、もはやホーマーの世界は別世界のように感じられ、違和感なく読むことは不可能になっていた。

II

ドライデンは諷刺の起源を明らかにした後、ホラス、ジュヴェナール、ペルシウスという古代ローマの三人の代表的な諷刺詩人の比較検討へと進むわけだが、その前に彼は少し、多くの人々が持っている各作家に対する偏見について論じる。人はそれぞれお気に入りの作家がいるだろうが、その作家が他より優れているとは限らない。ドライデンは好みによって、論じる作家が正当に評価されなくなる危険性を指摘する。ドライデン自身、ジュヴェナールとペルシウスの翻訳はしたが、ホラスはしていないため、後者よりも前者二人に愛着を感じたとしても仕方のない事であるが、そのことでかえって彼は慎重にならねばと自分を戒める。この公平さを保とうとする彼の態度が、ジョンソンが彼を「イギリス批評の父」と呼んだ大きな一因となっているだろう。政治的にも宗教的にも無節操だと言われ、その豹変ぶりを非難されてきたが、ドライデンは懐疑的な性格なのであり、独断を嫌ったのである。とにかく、偏見の排除について述べていることはドライデンらしいと言えよう。

いよいよ三人を論じていくわけであるが、諷刺の起源の考察でもそうであったように、ここでもそれぞれの支持者の意見をもとに彼自身の見解を組み立てていく。ホラスの優位を説くのはヘインシウスとダシエ、ジュヴェナール派はスカリゲルとリガルチウス、ペルシウスはカソーボンが擁護する。

まずはペルシウスからであるが、ドライデンは彼を他の二人に劣るとする。その理由として始めに三点挙げている。一つ目は、彼の韻文がぎこちなく、言葉が適切に選ばれていず、ラテン語の純正さも損なわれている事。二つ目は、用語が堅く、比喩があまりに奇抜であり、修辭語句がかなり無理に使用されている事。三つ目は、曖昧で解釈が難解である事。これらの欠点を述べた後、さらに 'he rather insulted over vice and folly, than expose them, like Juvenal and Horace'⁽⁷⁾ と言い、その露骨さや不愉快さを指摘する。

次に、対立するカソーボンとスカリゲル両者の意見を述べながら、さらにペルシウスの問題点を明らかにしていく。ペルシウスは曖昧であるとのスカリゲルの意見には、カソーボンはそういう点もある事を認めながら、他の偉大な作家にも見られることだと言う。ドライデンはペルシウスは時々ではなく、たいてい曖昧なのだと結論する。

Persius was an apt scholar; and when he was bidden to be obscure in some places, where his life and safety were in question, took the same counsel for all his books; and never afterwards wrote ten lines together clearly.⁽⁸⁾

しかし、欠点を挙げるばかりではなく、公平にペルシウスの長所も分析する。諷刺は道德哲学としての性質を持つ。それ故、もっとも有効に教育する者が栄光を勝ち取る。このようにド

ライデンは考えて、ペルシウスの哲学面を考察する。彼の哲学の基礎はストア哲学である。魂における厳格な美德の形成、富や名誉などの軽視、これらの教義が彼の人生と同じく、彼の諷刺全体に表明されている。彼の諷刺は徳の高い生活の完成のためのあらゆる方法を示した。この点において、彼は他の二人に優るとドライデンは言う。

He sticks to his own philosophy; he shifts not sides, like Horace, who is sometimes an Epicurian, sometimes a Stoic, sometimes an Eclectic, as his present humour leads him; nor declaims like Juvenal against vices, more like an orator than a philosopher. Persius is everywhere the same; true to the dogmas of his master.⁽⁹⁾

最後にカソーボンのホラス批判に対するドライデンの反論がある。カソーボンはホラスが収税吏の子であり、常に生まれや教育の低さを感じていた、そして彼の比喩も主題同様卑しいものなどと彼を見下している。一方、ペルシウスは高貴な生まれであることで、ホラスよりも評価される。これに対してドライデンは、生まれは卑しくても教育面では劣らない事を証明する。

以上がペルシウスについてのドライデンの意見である。三人の中で一番低い位置を与えられているが、現代でも他の二人と比べるとその影の薄さは否めない。初期のイギリス諷刺作家には多大な影響を与えたが、結局一時の流行に過ぎなかった。十分に洗練されていないことが逆に、奇抜に映り好まれたのだろう。

次にホラスとジュヴェナルの比較に入るが、まずランブーンについて少し述べている。ドライデンはランブーンを書くことが許される二つの理由を挙げる。一つは復讐のためであり、もう一つは攻撃する相手が公共の厄介者である場合である。前者は単なる言い訳だが、後者こそ詩人の職務だとドライデンは言う。そして彼は、この職務を果たしている諷刺作家の少なさを嘆く。彼は彼らが人物選択も適切でない上に、ウィットが常に欠けていると言う。

there can be no pleasantry where there is no wit; no impression can be made where there is no truth for the foundation.⁰⁰

彼はこの話題を脱線だと言うが、このウィットの問題は重要である。

I would willingly devide the palm betwixt them, upon the two heads of profit and delight, which are the two ends of poetry in general. It must be granted, by the favourers of Juvenal, that Horace is the more copious and profitable in his instructions of human life; but, in my particular opinion, which I set not up for a standard to better judgements,

Juvenal is the more delightful author. I am profited by both, I am pleased with both; but I owe more to Horace for my instruction, and more to Juvenal for my pleasure.⁰⁰

‘profit’ と ‘delight’ が詩の目的であるという考えは、古典主義の重要な法則の一つである。これはホラスが『詩論』(The Art of Poetry)の中で「詩人が狙うのは、役に立つか、喜ばせるか、あるいは人生の楽しみにもなれば益にもなるものを語るか、のいずれかである。」⁰³と述べていることによる。このように詩に教育的役割と娯楽性を与えるべきだとの考えは、ルネサンスによって広まり、スペンサーなどからドライデンにまで受け継がれてきた。しかし、ドライデンの意見では、ホラス自身がこの二つの目的をうまく達成していないことになる。

ホラスがジュヴェナールよりも教育面で優る理由は、前者の教訓が広範囲にわたるのに対し、後者のそれは限定されているからだと言います。ある特定の悪徳を暴露し攻撃するジュヴェナールには教訓的なところもあるが、それはあちこちに散在している。一方、ホラスにおいてはすべての行で教訓的であり、常に道徳的であると彼は言う。ホラスが暴露するものは愚かさであって、悪徳ではない。

The exhortations of Persius are confined to nobleman; and the Stoic philosophy is that alone which he recommends to them; Juvenal exhorts to particular virtues, as they are opposed to those vices against which he declaims; but Horace laughs to shame all follies, and insinuates virtues rather by familiar examples than by the severity of precepts.⁰³

このように三人の特徴をまとめた後、それでもホラスの与える喜びは弱いものだと繰り返し、次のように言う。

His urbanity, that is his good manners, are to be commended, but his wit is faint; and his salt, if I may dare to say so, almost insipid. Juvenal is of a more vigorous and masculine wit;⁰⁴

先にも見たように、ドライデンにとってウィットが喜びを生み出すためには必要なのだ。彼がウィットをどのように考えていたかについては、『驚異の年』(Annus Mirabilis, 1667)の序文に次のような言葉がある。

The composition of all poems is or ought to be of wit, and wit in the poet, or wit writing (if you will give me leave to use a school distinction) is no other than the faculty of imagination in the writer. which like a nimble spaniel beats over and ranges through the

field of memory, till it springs the quarry it hunted after; or without metaphor, which searches over all the memory for the species or ideas of those things which it designs to represent. Wit written is that which is well defined, the happy result of thought or product of that imagination. . . . it is some lively and apt description, dressed in such colours of speech that it sets before your eyes the absent object as perfectly and more delightfully than nature.

ここでは、ウイットは想像力の働きと考えられている。それが、表現しようとするもののために捜し求めるのは、結局、その対象にもっとも相応しい言葉である。対象が表現に一致、調和した時に、生き生きしたものになり、より多くの喜びを生むのである。

Horace is always on the amble, Juvenal on the gallop; but his way is perpetually on carpet-ground. He goes with more impetuosity than Horace, but as securely; and the swiftness adds a more lively agitation to the spirits. The low style of Horace is according to his subject, that is, generally grovelling.

二人の文体を馬の足並みに例えた表現は面白い。ジュヴェナルの場合、一つ一つのウイットはギャロップのように力強い刺激を与え続けるが、ウイットが適切に使用されているために、決して楽しみの妨げにならず、読者をぐいぐい引き付け、スムーズに読ませていくということだろう。一方、ホラスは教訓面が優るため、道徳を説いて考えさせてしまい、多少、退屈を感じさせてしまうということだろう。

ドライデンはホラスがルキリウスを意識していたと考える。ルキリウスは文体や韻律、語の純正さを気にしなかった。そのためホラスは、彼の諷刺の明確さに心をくだき、彼が活力によって達することができた高みにまで昇ることはしなかったのだとドライデンは推測する。このことから、ドライデンは彼がジュヴェナルと同じ喜びを与えられないのは、彼自身のせいではなく、彼の使った道具にあるとする。

しかし、詩におけるもっとも大きな楽しみは韻律であるとして次のように言う。

when there is anything deficient in numbers and sound, the reader is uneasy and unsatisfied; he wants something of his complement, desires somewhat which he finds not: and this being the manifest defect of Horace, 'tis no wonder that, finding it supplied in Juvenal, we are more delighted with him. And besides this, the sauce of Juvenal is more poignant, to create in us an appetite of reading him. the meat of Horace is more nourishing; but the cookery of Juvenal more exquisite: so that, granting Horace to be the more general

philosopher, we cannot deny that Juvenal was greater poet, I mean in satire.⁰⁷

ドライデンにとって読者をまず読む気にさせることが大事なのである。メッセージが良いだけでは不十分で、それをどう料理して読者の興味をそそるかなのである。詩人が哲学者と異なるのは、前者が言葉の芸術家で、あらゆる技法を用いて目的とする効果を言葉にもたせようとする点である。

詩の二つの目的である 'profit' と 'delight' に関して彼の考えは明白である。

Let profit have the pre-eminence of honour, in the end of poetry. Pleasure, though but the second in degree, is the first in favour. And who would not choose to be loved better, rather than to be esteemed?⁰⁸

また、次のようにも言っている。

They who will not grant me, that pleasure is one of the ends of poetry, but that it is only a means of compassing the only end, which is instruction, must yet allow, that, without the means of pleasure, the instruction is but a bare and dry philosophy: a crude preparation of morals, which we may have from Aristotle and Epictetus, with more profit than from any poet.⁰⁹

道徳的なこと、あるいは観念的なことと喜びは、どこがどちらの要素と、容易に分けることはできない。優れた作品では特にそうだろう。相互に密接に関係していて、両方の目的をより効果的に達成しているのである。確かに喜びの面が強調されているように思われるが、それはホラスを論じているからである。ドライデンはホラスに喜びの要素が欠けるというほど、ジュヴェナルに教訓的要素が欠けるとは言っていない。どちらが大事かよりも、両方のバランスがとれていて、片寄らないことが大事なのだ。ドライデンは、ホラスが教訓面に片寄っていて、その方面の称賛ばかりが与えられてきたことを、彼の支持者であるダシエの言葉から証明してみせている。ジュヴェナルは少なくとも、ホラスよりは極端ではないとドライデンには思えたのだろう。

ドライデンはまた、両者が生きた時代の違いを考察し、彼らの作品への影響を指摘する。

After all, Horace had the disadvantage of the times in which he lived; they were better for the man, but worse for the satirist. 'Tis generally said, that those enormous vices which were practiced under the reign of Domitian were unknown in the time of Augustus Caesar;

that therefore Juvenal had a larger field than Horace.²⁰³

アウグスツスはローマ帝国の初代皇帝として強固な体制をつくり、新しい時代を開いた大政治家だった。長い戦いの世を征し、ローマに平和をもたらした救世主だった。一方、ドミチアヌス帝は元老院との協調路線を破り、再びネロ帝時代のような専制政治を行う。彼は自分のことを「主にして神」と呼ばせ、気に入らない有力者を次々に処刑した。

ドミチアヌス帝の時代に生きたジュヴェナールには社会の悪徳はかっこうの攻撃対象だった。ホラスの時代については、ドライデンはアウグスツスが平和を築いていく一方で、国政強化のため、かなり専制的な行いをしていて、征服された人々の間では憎しみが消えなかったことを挙げる。このためにアウグスツスは、自分を中傷するランブーンや諷刺詩などを禁止する勅令を出した。このような時代に生きたホラスの作風は自然と制限される。

Horace, as he was courtier, complied with the interest of his master; and, avoiding the lashing of greater crimes, confined himself to the ridiculing of petty vices and common follies;²⁰⁴

ドライデンのこのような時代考察は、彼の批評の特徴である。これも偏見を避け、公平さを保とうという姿勢の現れと言えるだろう。

yet still the nicest and most delicate touches of satire consist in fine raillery. This, my Lord, is your particular talent, to which even Juvenal could not arrive. 'Tis not reading, 'tis not imitation of an author, which can produce this fineness it must inborn; it must proceed from a genius, and particular way of thinking, which is not to be taught; and therefore not to be imitated by him who has it not from nature. How easy is it to call rouge and villain, and that wittily! But how hard to make a man appear a fool, a blockhead, or a knave, without using any of those opprobrious terms!²⁰⁵

ここにはドライデンの諷刺に対する考え方がよく現れている。彼は優れた諷刺詩には 'fine raillery' が必要だと言う。単なる罵り言葉と文学的なものを分ける要素と言えるだろう。諷刺詩における基本的な調子は攻撃対象への肯定的態度である。口汚い言葉を使わず非難しようとすれば、肯定、あるいは称賛しながら非難の意味を込めることが、より効果的である。つまり、'fine raillery' とは 'irony' に近いものとも言えるだろう。しかし、アイロニーはもともと諷刺の要素を持っているが、諷刺的でないアイロニーはより厳しく残酷である。ここでは、そのようなアイロニーではなく、もっと人を喜ばせる要素の強いものである。'A witty man is

tickled while he is hurt in this manner’⁸³ と言うように、彼には喜びの要素は欠かせないものである。『アブサロムとアキトフェル』(*Absalom and Achitophel*, 1681) の序文においても同様に ‘there’s a sweetness in good verse which tickles even while it hurts’⁸⁴ という言葉が見られる。

yet there is still a vast difference betwixt the slovenly butchering of a man, and the fineness of a stroke that separates the head from the body, and leaves it standing in its place.⁸⁵

派手に傷つけて倒すこともできるが、あまり外傷なく、同じぐらいのダメージを与えることもできる。この技が素晴らしく、完璧であればあるほど、その威力と見るものを楽しませる効果は増す。つまり、傷つけることと楽しませることが同時に達成される。

このようにドライデンはジュヴェナールよりもホラスの作風を優れているとし好んだ。しかし、次のようにホラスの欠点を指摘する。

This manner of Horace is indeed the best; but Horace has not executed it altogether so happily. at least no often. The manner of Juvenal is confessed to be inferior to the former, but Juvenal has excelled him in his performance. Juvenal has railed more wittily than Horace has rallied. Horace means to make his readers laugh, but he is not sure of his experiment. Juvenal always intends to move your indignation, and he always brings about his purpose.⁸⁶

ホラスは自分で選んだ道具を使いこなせず効果を減じた。方法は劣っていても、諷刺としての効果を十分に持たせたジュヴェナールをドライデンは評価する。

it ought only to treat of one subject; to be confined to one particular theme; or at least, to one principally. If other vices occur in the management of the chief, they should only be transiently lashed, and not be insisted on, so as to make the design double. As in a play of the English fashion, which we call a tragi-comedy, there is to be but one main design; and though there be an underplot, or second walk of comical characters and adventures, yet they are subservient to the chief fable, carried along under it, and helping to it, so that the drama may not seem a monster with two heads.⁸⁷

これはアリストテレスの『詩学』(*The Poetics*) で主張されている筋の一致の考えに基づい

たものである。ホラスの諷刺では多くが一つ以上の議論で成り立っていて、それぞれ独立してある一つの主題に従属していない。アリオストやスペンサーも同様に、筋の不統一が欠点として挙げられていた。ジュヴェナールの方はペルシウスと同じ方法をとって意図の統一を計った。このような理由からも、ドライデンはジュヴェナールの優越性を主張する。

結 果

ドライデンは諷刺の定義をするにあたって、ヘインシウスの言葉を引用している。

Satire is a kind of poetry, without a series of action, invented for the purging of our minds; in which human vices, ignorance, and errors, and all things besides, which are produced from them in every man, are severely reprehended; partly dramatically, partly simply, and sometimes in both kinds of speaking; but, for the most part, figuratively, and occultly; consisting in a low familiar way, chiefly in a sharp and pungent manner of speech; but partly, also, in a facetious and civil way of jesting; by which either hatred, or laughter, or indignation, is moved.²⁸⁾

ドライデンはこの言葉に対して、混乱していて、しかも全くホラスの作風に当てはまるものと言う。特に‘consisting in a low familiar way of speech’という言葉はホラスのみ当てはまり、他の二人には当てはまらないと言う。確かに、あらゆる種類の諷刺詩の特徴をすべて詰め込んだような、まとまりのないものである。ドライデン自身のより簡潔な定義は『アブサロムとアキトフェル』の序文に見られる。‘The true end of satire is amendment of vices by correction’²⁹⁾あるいは、‘I have but laughed at some men’s follies when I could have declaimed against their vices; and other men’s virtues I have commended as freely as I have taxed their crimes.’³⁰⁾とも述べられている。ドライデンにとっての諷刺とは、人間の愚行や悪徳を暴くと同時に、矯正したり美徳を説くことなのである。これだけでは、現代の考えとあまり違わず、したがって本質的なことをついていると言えるのであるが、ドライデンの場合、さらに古典主義的思想が加わる。‘profit’と‘delight’という二つの目的、統一性などが重視されていた。これらは諷刺詩に限らず、詩一般に関する法則だが、ドライデンはこれらが諷刺の効果を上げるのにも有効だと証明してみせたと言えるだろう。

また、叙事詩との関わりも重要であった。

I have given your Lordship but this bare hint, in what verse and in what manner this sort of satire may be best managed. Had I time, I could enlarge on the beautiful turns of words

and thoughts, which are as requisite in this, as in heroic poetry itself, of which the satire is undoubtedly a species.⁶¹⁾

ドライデンは明確に諷刺詩が叙事詩の一種であると述べている。『アブサロムとアキトフェル』が‘A Satire’ではなく‘A Poem’となっているのも、叙事詩の風格を持たせたかったためだろう。ポール・ラムゼイはこの詩を、上記引用の言葉から、ドライデンにとって、叙事詩が「属」、諷刺詩が「種」であるので、‘satirical heroic poem’と呼ぶのがより正確だろうと言っている。⁶²⁾ 叙事詩の法則が諷刺詩にも適応されている理由は、この辺にもうかがえる。

ドライデンの時代は英雄不在の世であった。アウグスツスやエリザベス女王に匹敵する人物は、王政復古期には見当たらなかった。その代わり、彼が見たのは偽善者などの憎むべき存在だった。そのような時代に叙事詩を書く困難を、歴史認識の鋭いドライデンが全く気付かなかったとは思えない。非難されるべき人物を英雄扱いする諷刺の方法は、彼の叙事詩への野心と社会的状況から自然ととられた形式だったと言えるだろう。

註

- (1) H.T. Swedenberg, Jr., ed., *The Works of John Dryden*, vol. IV, (University of California Press, London. 1974) 515
- (2) W.P. Ker, ed., *Essays of John Dryden*, vol. II, (Russell and Russell, New York. 1961) 37-38
- (3) Ker 29
- (4) Ker 43
- (5) Ker 43
- (6) Ker 30-31
- (7) Ker 71
- (8) Ker 73
- (9) Ker 76-77
- (10) Ker 81
- (11) Ker 81-82
- (12) 岡道男訳『詩論』(岩波書店, 1997年) 249
- (13) Ker 84
- (14) Ker 84
- (15) Paul Hammond, ed., *The Poems of John Dryden*, vol. I, (Longman, London. 1995) 119-120
- (16) Ker 85
- (17) Ker 86
- (18) Ker 87
- (19) Ker 112
- (20) Ker 87
- (21) Ker 90
- (22) Ker 92-93
- (23) Ker 93

- (24) Hammond 451
- (25) Ker 93
- (26) Ker 94-95
- (27) Ker 102-103
- (28) Ker 100
- (29) Hammond 453
- (30) Hammond 451
- (31) Ker 108
- (32) Paul Ramsey, *The Art of John Dryden*, (University of Kentucky Press, Lexington. 1969) 97

(ないとう みつる 文学研究科英米文学専攻博士後期課程) 1997年10月16日受理

